

特別企画 海外登山編

今回 大エビ(海老原 道夫)さんが2年前に実践した「ヒンズー・ラジ」の記録をいただいたのをきっかけに当会員に
関係する海外登山記録をまとめた。

先輩達はヒマラヤ諸国がまだ登山開放前から活動している。先日テレビで放映、空撮された「バインター・ブラック」
の圧倒・絶望感、この山を選択した諸先輩には頭が下がると同時に当会の「海外」登頂率が低いのも理解出来る。
でもたくさんの経験を重ねた結果だから恥じることはまったくくない。

今の登山界はスポーツ的になってきているが、ヒマラヤは合理的、効率的な登山が出来にくい。だからこそ長い時
間をかけ苦勞して手に入れたものは必ず実を結ぶ。

山荘の子ねずみクライマー記

1967	7、25～	ヒンズーラジ イーカー・ゾム(5270m) プチ・ゾム(5473m)	海老原 道夫、高橋善数
1968	7、6～ 8、3	コーカサス ウシバ峰	福岡璋祐他7名 (RCC II カフガス遠征隊)
1971	8、15～9、23	インド ハヌマンティバ北稜	海老原 政夫、高山 要 他10名 (無宗楽生会)
1976	5、31～9、23	カラコルム バインターブラック(7285 m)	西原 正、植田 宗男、吉田 英樹、 山口 秀男、村島 雅博、鈴木 利一 小林 武希(医師)
1982	5、14～8、20	カラコルム ボィオハグール (7329m) ドゥアン・アシール I 峰	植田 宗男、西原 正、渥美 直哉 小林 之美、田村 正巳、鈴木 武樹 (医師)
1982	8、16～19	ヨーロッパ モンブラン山群 プチ・ドリー西壁	小島 雄志 他1名
1983	10、2～15	チェコスロバキア ハイ・タトラ山塊	西原 正 他8名(都岳連山岳救助隊)
1989	7、23～ 8、29	インド ガンゴトリ バギラッティ山群 バアスキーパルバット北面(6792m)	伊藤 守 他2名(HAJ)
1991	7、7～9、5	インド J&K ヌン峰西稜(7135m)	伊藤 守、伊藤 英世 他10名(HAJ)
1992	7、19～8、23	インド J&K ヌン峰西稜(7135m)	鈴木 典仁 他10名(HAJ)
1993	5、21～ 8、15	カラコルム ブロード・ピーク(8047m)西稜	伊藤 守 他9名(JBE-93)
1993	7、24～ 8、28	中国 新疆ウイグル自治区ムスターグ・アタ(7546m)	伊藤 英世 他10名(HAJ)
1993	8、7	アメリカ ヨセミテ溪谷(偵察)	松山 茂実
1994	12、27～1、13	ネパール クーンブ山群 カラパタール(5545m)	塚田 秀美 他
1998	7、19～ 8、25	中国 チベット自治区 ニンチン・カンサ(7206m)	伊藤 守 清水 久江 他(HAJ)
1999	8、16～9、6	パキスタン ヒンズーラジ パフシュターロゴル流域 ザミチーリー谷 三角形のスッキリしたピーク 5300m	海老原 道夫
1999	9、15～26	アメリカ ヨセミテ	大山、木戸、松山、岡村

初老の身を引かず1人でヒンズーラジへ

海老原 道夫

58才の初老の身を引かず1人でヒンズーラジに向いました。

1999年の2月になって、少しの臨時収入が入った事で、そのままにしていれば何となく生活費に消えてしまいそうだったので、思いでに残る使い方をしようと思い立ったのが、今回のヒンズーラジ行となったのでした。そんな訳で、仲間を誘ってパーティーを組む気も無く、また6000m峰以上の登山許可を得るには、もう時間切れとなっていました。

ともあれ、フンザ方面に明るい、長谷川昌美さんや、私の所属する東京朝霧山岳会の西原君達に相談した結果、フンザあたりでは6000m以下のピークらしいものはあまりなく、結局段々と西の方に目標が移って行き、気がついたら30年以上も前に青春の血を沸かせた、ヒンズーラジに向かう事となりました。

日本からは個人装備だけを持って出発し、テントその他の装備及びパキスタン国内の旅、宿泊等の計画、そしてガイドは、イスラマバードのナジールサビール事務所にすっかりおまかせすると云う気軽な超ライトエクスペディションがありました。とは云え、事前の、10回近くのファックスの往復打ち合わせや、英訳については長谷川昌美さんにすっかりお世話になってしまいました。

8月18日

1台のジープに全装備、食糧、私とガイドのハッサン、コックのニコーとそのアシスタントの弟のアビダビ君と人間4人が乗り込み、ギルギットのホテルから西方にギルギット河からキズル河をチトルル方面に、ハードなドライブに出発、途中の道路崩壊による乗り換え等もあり、もう日も暮れる頃になって、やっと目的のパフシューターロゴルの出合いの村のシャマランにつき、適当なキャンプ地を見つける時間も無く、学校の庭に1泊した。

翌朝、学校の先生が、エライ勢いで怒って来たが、もちろん現地の事情については、ガイドのハッサン君の責任なので、私は知らん顔をきめこんだ。

8月19日～20日

パフシューターロゴルを北に向かって、2日間さかのぼる。パフシューターロゴルの源は、ヒンズーラジのシャハンドクの東面から発して、出合いのシャマランまで大体南に流れ、全体で35Km位の距離をもっている。

5～6Km毎にある家屋は定住の家は無く、夏だけの放牧に利用する仮住居である。6頭のロバと我々レギュラーメンバー4人と、ロバを扱う4人とで登る事2日間、そう急な登りではないが、両側の山からせまる壁は近くまでせまり見通しが悪く地図上では近くにあるはずの5000m以上の山々の頂上付近は、全く見る事が出来ず、そのアプローチの見当がつかない。一応の計画では、最奥の村のボイタあたりの周囲の山に登る事にしているが、具体的にどのピークと決めている訳では無いので、良い山があればと、期待しながら登るが、そんな訳で、結局2日間せつせつとロバと競争するように登り歩き、右(東南東)にアノゴルを分ける。

二俣の右岸に仮のBCを設営し、ここを拠点として周囲の山々を偵察する事にする。(標高3500m)このBCの位置で、谷の奥にシャハンドクの一部を見る事が出来た。こちら側に向かって急な岩壁と、その上部の氷壁が鋭く、さすがヒンズーラジと思う。

夕方、近くの村人が遊びに来てくれ、私もハッサンも早速情報収集にかかり近くの山々の名称、地図上の位置などを聞き取る事ができた。そこでハッサンと作戦会議を開いたりしたが、彼の持っている資料はどうにもたよりなく、私が日本から持って行ったヒンズーラジ会議で作成した地図のコピーを貸す事にする。

8月21日

パフシューターロゴルの最奥の二俣まで、3時間ほどかけて登る。ルートは相変わらず川沿いの踏み跡を進み、BCから小一時間でこの谷最終部落のボイタを過ぎ、二俣までは、左右の5000m程度の岩峰から落ちてくるガレと小さな林の間を通り抜けたりしながら、のんびりとした道中だった。

曇りがちの空なので、シャハンドクの頂上は見ることが出来なかったが、頂稜と思われる部分が見えるので、それに至るルートの偵察と写真どりをやる事が出来た。この付近の標高は4100m程度である。

シャハンドクと反対側の谷(ザミチーリー)は二俣から右に入り、入口に深さ150m程度のゴルジュをもち、その奥でもう一度右にカーブしているため視認する事は出来ない。

そんな訳で、肝心の私の登りたいとか登れそうな適当な山を特定する事は出来ないので明日はBCの谷をはさんだ反対側の4500m程度の山に登り、更に周囲の山を偵察する事にして帰路についた。

帰り道のボイタでは、味の濃い、大変おいしいチャイとヨーグルトを御馳走になり、降り出した雨の中をBCに急いだ。

8月22日

BCの向かいの山(4500m程度)に登る。この山と、BC直上の5000m程度の山は、この付近には珍しく、草と土の山である。

他のピークは、いずれも谷近くから急なガレがはい上がり、その上は岩壁が立ち上がり、頂上近くは雪と岩とがミックスし鋭く立っている。これらの山は高度順化と偵察を兼ねて登る山としてはいずれも不適當なので、本日は向かいの山に登る。

向かいの山に取り付くには、当然の事ながら対岸に渡らなければならないのだが、付近に橋が無く、一度ボイタ方向へ30分登ってから橋を渡り、対岸に戻って来ると言う無駄なことをしなければならなく、一時間かけて20m位の川を渡った事になる。

山の傾斜はかなりきつく平均45度を越え、とにかく頂上に向かってダイレクトに登るのでポツポツ60才となる身にとってはまことに辛い。

数年前、エベレスト、パキスタン隊のメンバーだったハッサンと私との差は月とスプーンで、登り出すとハッサンの姿は、あっと言う間に遠ざかり、私はハッサンの居た所を目指して必死にはい登ると云った3時間だった。

途中2~3回雷雨があり、空ではゴロゴロ、数日前から調子が悪くなっている私の腹の中もゴロゴロで、大変な登りだった。この山のほぼ頂上、標高4300m程度の台地まで登り今日の行動の終わりとし、じっくりと廻りの山を観察した。

私達の登っている山の尾根続きの5000m以上の山はとても立派な氷河を持っているが頂稜が長くピークがはっきりしないのでイマイチ。

BCの直上の山は5000m付近までは草と土の斜面でルックスが悪い。だがその奥の岩と雪のピークはすごい岩壁と岩稜にかこまれ、地図で判断すると5900m峰の、ルックスも高さも申し分無いのだが途中水を得られるビバークポイントがなく、今日登った苦しさから判断してあまりに荷が重く、残念ながら諦めざるを得ない。

そして唯一、昨日その奥を見る事が出来なかったザミチーリー谷の奥にある手前の岩稜越しに、なかなか鋭い雪と岩のピークを見つけ、それに注目する事にした。

明日一日は、お疲れ休みとし、明後日にもう一度、ザミチーリー谷に入る事として下山する。

8月24日

ザミチーリー谷に入る

BCをいつもの通りAM8:30頃出発し、ボイタの子供達と手を振りあいシャハンドクⅡ峰下部岩壁下の二俣を右折し、ザミチーリー谷に入る。入り口にあるゴルジュ帯を大きく高巻き2時間ほどでテントを張れそうな川沿いの草の台地についた。ここからは、ザミチーリー谷の最奥部の氷河も確認出来る。氷河の直上は案に相違して、最上部にはピークは無くコル状になっていてその右側には、雪を多くつけた岩稜状のピークが連なっているが、全体のスケールのわりには高くない。コルの左側には、雪はそれほどつけてはいないが、三角形のスッキリしたピークがあり、これの方が大分高く5300m程度と思われる。このあたりでは、シャハンドクのグループを除くと一番高そうに見えるルックスもマアマアだ。

正面の岩壁は、谷川岳で言えば、烏帽子奥壁ぐらいの傾斜を持っているようで、その下部に大きなモレーンとそのサイドの岩稜が有り、それを登ってからモレーン上を右に渡りスカイラインのリッジを登るか正面の岩壁を登るか、今は見えないが左側にありそうなルンゼを登り左側のスカイラインのリッジを登るか、モレーンの上から三通りのルートを選べそうなので、このピークを今回の目標とする事とする。アノゴル出合のBCに入ってから、これで5日間かけてやっと目標の山を決めた訳でガイド付きの山登りとしてはまことに能率の悪い運びとなった。

ハッサンは、ギルギットにいる時から、パフシュターロゴルには入った事は無いと云っていたので今さら責めても仕方ない事なのだが、山を探し廻るのでなく高度順化に時間が欲しかった。

8月26日

BCをザミチーリー谷の台地(標高4300m位)に引っ越し8月25日は引っ越しの為のロバを下から連れて来る為に一日ウエイトして26日になってBCを上げる。

当初は私とハッサンのテントだけを上げるのかと思い、下に残す荷と上の荷とを分けてパッキングしていたのだが、なんと食堂テントまでたたみ始めたのでびっくり。ハッサンに全部上に運ぶのかとたしかめれば“ハイ”そして我々は小さいコンロを持っていないから。と云う。今度はホントにびっくりだ。小さいコンロが無いこれにはマイッタ。それではACを滞在させる事が出来ないでは無いか。私は4300mの新しいBCから5300mのピークヘワンビバークのアルパインスタイルで登れるほど強くない。結構ハードなアタックになりそう。とにかく夕方には4300mの新しいBCに引っ越した。今度のロバ隊は、ボイタの人がオーナーで、ご主人と長男(多分)とは灌木にシートをかけていく晩か過ごし、近くでハンティングをすると云いライフルをかついで来た。

夕方から雨が降って来たので彼らが心配になって、のぞきに行くとシート下で焚き火をして結構楽しそうだった。

8月27日

正面岩壁下に AC を上げる

午前中は雨で動きがとれず、今日の行動はほとんど諦めていた所、昼を過ぎてから雲が動き始め、山の遠望も効き始めたので、急いで出発した。ハッサンとアビダビとでテントその他の荷物をほとんど背負ってしまい、私は小さいサブザックのままの出発で良いのかと悩んでしまう。

私は岩稜帯のなかばを登る頃にはもうすっかりバテてしまい、彼らとの差は大変なものだった。

アビダビ君が浮石をつかんで7~8mも落ちたり、私が遅かったりで、モレーンの一角に辿りつく頃はもう夕方になってしまった。ここでアビダビ君の役目は終わり、大急ぎで BC に引き返し、私達二人は更にモレーンの最奥部、岩壁のほとんど直下に二つのアタック用テントを張った。(標高 4700m 位)

もうポツポツ暗くなってきて、再び雪が降って来たので、夕食もそこそこにテントにもぐりこんだ。

8月28日

頂上アタック

今までに無く素晴らしい快晴の朝がやって来たが昨夜の雪でテントの廻りはすっかり白く、岩壁は朝日が逆光の為に、その様子を伺う事が出来ないため、ゆっくりスタートした。岩壁は大体 600~700m 程度の標高差で、傾斜がきつい岩質が良くホールドスタンスがしっかりしていて、落石の心配もほとんど無かったので、アンザイレンの必要もなく各々のペースで登る事が出来た。とは云え私はモレーンを登って岩壁に着くまでにもうハッサンを待たせるほど遅い歩みで、岩を登り出しても少しもピッチは上がりず、高度障害がみえみえの状態だった。

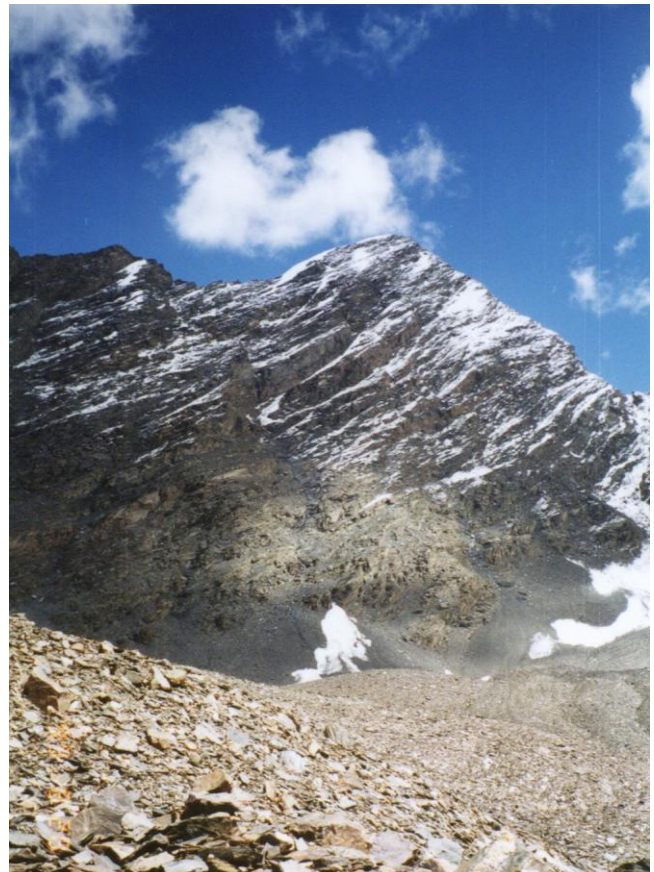
一步一步が本当にきつくて、頭上の 5~6m 位のルートを読むのが精一杯でハッサンの位置もろくに確認出来ないほどだった。それでも二人のルートファイティングにほとんど変わり無く、大体同じリッジを越えたり、ルンゼを登って行った。登り始めて二時間半で、岩壁の半分を登ったと思われる頃、急に腹具合が悪くなり、急いで用をたした後に、突然身体がフラフラして全身がだるくなり、掴んでいるホールドまで離してしまいたくなった。

この状況をハッサンが見ていたため初めてザイルを出し、アップザイレンで降りて来て取り敢えず 5~6m 上のテラスに私を導いてくれた。テラスでビスケット等をかじりながら回復を待たしたが、今日のうちは、もう駄目だろうと判断しハッサンにそう告げた。周囲のシーンをカメラに収め、自分の位置の確認をして(後日その写真で判断すると岩壁の三分の二を登っていた)下る事にした。標高 5100m 程度で頂上まであと 200m と思われた。

下りはさすがに自信がなく全部アンザイレンしてハッサンに支えてもらって降りた。降りるにつれて身体はどんどん楽になり AC に戻る頃には、何となく朝の出発のときと変わらない様な気がした。

ただ腕のたるさでけはその後 2~3 日も残った。下りは 1 時間もかからなかった。AC を撤収し相変わらずハッサンが重荷を背負いモレーンから下部の岩稜へと下る。ハッサンも登りの時のルートを忘れてしまい、かまわず急なガレを強引に下ると、その中間位の所で、横の岩稜上にヒョッコリとニコー君と、ボイタのご主人とが現れ、そのサポートを受けて下の河原におりる事が出来た。BC からプリズムで私達の岩壁での動きを見る事が出来ていたとの事で下山にかかる姿を見て急いで登って来てくれたとの事だった。国境を越えた男気のような物を感じホロリとする。

もう一度、体勢を立て直し再度アタックをかけるにはもう日数もなく、これで今回の登山は終了する事となった。

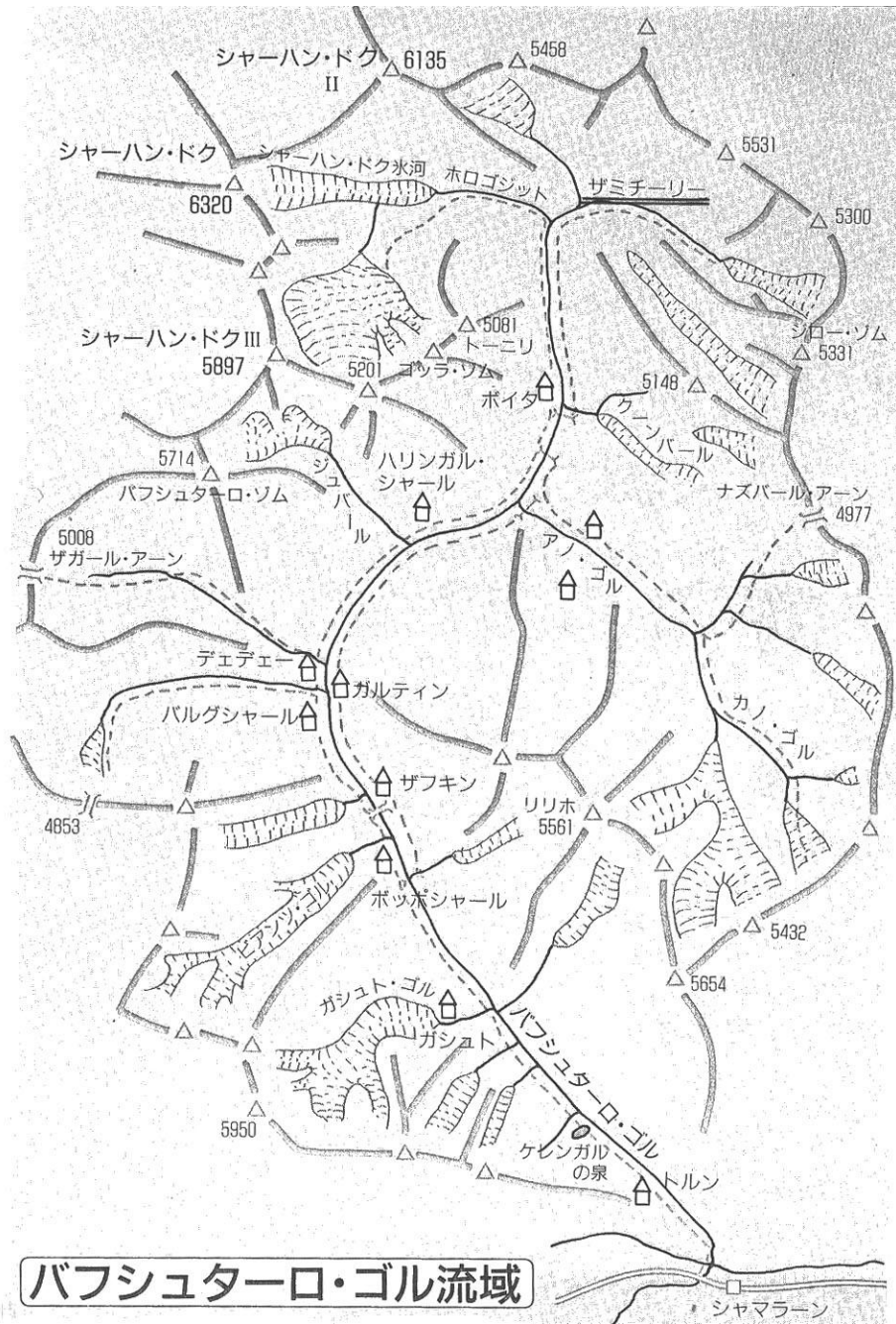


頂上アタックを終え ACを撤収しモレーンを下りかける

付近にて ⇒

左側のルンゼより登行 コル下方の大ハング気味の岩下あたりが

最高到達点



参考文献

- | | |
|---------------------------|----------|
| ヒマラヤの高峰(④ヒンズーラジ) | 深田久弥 白水社 |
| 地球の歩き方(パキスタン) | ダイヤモンド社 |
| 山岳年鑑 '76 '82 岩と雪 | 山と溪谷社 |
| 月刊 ヒマラヤ | 日本ヒマラヤ協会 |
| 朝霧(ASAGIRI 1932-1982) S57 | 東京朝霧山岳会 |
| 朝霧60周年記念誌(1992) | 東京朝霧山岳会 |
| 山行報告 1989-1999 | 東京朝霧山岳会 |